好み

まとゐはてゝ廣うなりし室の燈火のもとに、猶殘り居る三人四人に打むかひて、主人の君、こゝにおの〳〵が好む樣々のものあり、試にひき給へとて、鬮を出し給ふ。第一に引き給ひし君のは、蛇といへるなり。さる物好む人誰かあらむと一人がいへば、其鬮得たまひし君、おのれは嫌ふべき物とも思はず、何れの世何れの國人にも忌み嫌はるゝかれが身は、いかなる拙き宿世ならむ、草むらの草にまじりて一本さけるさ百合の花かげなどに、打守るやうにて居たらんよ、殊にうるはしくて、誠に美の極なりといひし美學者さへありといふ。美の極なりとのたまふか、さらば美といふもの此世になくてあらなん、おのれは繪にかきたるを見るだに好まず、いまだ小學校にありし時、ゑの手本に其繪のありしを、紙はりて見えぬやうにしたる事ありき、試驗の折そを題に選びし師は、あまりに恨めしと思ひき、されど點といふ恐しきものゝ爲には、書かねばならず、目をふさぎて紙はとりつれど、書かんにはよく見ねばかなはぬ事の苦しさに、生きたる心地もなかりき、いま思ひいでても身ふるひするやうなりといふに、あまりなる物の嫌ひざまかなと、人々をかしがる。第二の鬮は引かれたるに、雲といふのなり。こは餘りに高き御好み、雲の上まで登り給はんとにや、我等をもつれ給へといふ。否々世に雲をつかむとかいふらむやうに、あてもなう何一つの得る事

もなくて一生を經るにこそと笑ふ。第三は花といふなり。これこそ嫌ふ人はあらざらん、昔より歌はるゝは梅櫻、秋の八千草、今の詩人がめづるは白百合白菫忘れな草、いでそは人の心々にまかせおかまし、我はある春のあした、風ぬるき野をそゞろありきして、薄紫の小さき花を見いでぬ、あはれなる花よ、名は何といふらむ、いかなる神の御手に育てられて、まだうら若き春の光に、匂ひ出づるならんと、手にとればほろ〳〵と散りぬ、こは散りがたのにやと、まだしき程のを今一つ摘みとりたるに、こもまた脆くちりて碎けぬ、うき世の人の手にけがされじとのやうに、つまるゝやがてあわたゞしう散りゆくは此花のさがなりけり、此花こそいとよう我心を得たるものなれど、語り給ふ君が御目には、玉の露きらめきたり。第四は水といふなり。君は智者にていませばといふに、微笑み給ひて、これもまた人にめでらるゝ物にこそ、はてなき海に向へば心も廣うなりゆき、川の流にはたゆまぬ心を呼びさまさるゝやうにて といふ。我は海邊にたちては、珍らしき箱もちたる人の、大きなる龜の背にのりて、今にも浮び出でずやと待たれ、川にのぞみては、大きなる桃の實の流れ來ずやとのみ思ふといふ君あるに、餘りなる御戯れとにくむ。許させ給へ、そは戯にあなれど、まことに我深く好むは、かのさゝやかなる山の清水よ、昔、山姫の海の神に何をか傳へんとて、谷の清水におほせて、いかで海にゆきて そが答得て來とて使にやり給ひしを、世を經ても返り事のあらねば、いかで〴〵と

今もた江ず使の者出しやり給ふ、さればこそかの如く急ぎゆくならずやと思ふといふ。面白き御物語と興がれば、こはよべ見し夢なりと云に、あやしの御夢とをかしがる。さて殘りたる一つの鬮や何ならん、殘りたるなれば必よきならん、開かずして想像せんかた面白かるべしなどいふほど、氣早の君に開かれぬ。こは死といふのなりき。ものゝ終りはげに死なりけりと悟り給ふは誰ならむ。誰も〳〵好むまじきを、こゝの誰も引かざりしこそ嬉しけれといふほど、何處よりか小さき胡蝶一つ入り來て、燈火を一度二度めぐりてやがて落ちぬ。

【入力者注】

底本にルビはありませんが、一部付加しました。

底本に行をあわせるために、半角スペースを挿入した個所があります。

底本：佐々木信綱編「竹柏園集第弐編」
明治三十五(1902)年五月廿七日発行
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年四月二十六日
改訂：令和四(2022)年九月十三日

橘糸重【散文作品集】に戻る。